

講演録

2022年5月1日 大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年記念会 記念講演会

『外国語を学ぶ』のその先へ」

Learn Languages, and then?

筑波大学名誉教授 塩尻和子

2022年5月1日に大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年記念講演会が大阪府立国際会議場で開催されました。その際、大阪外国語大学卒業生を代表して、私は記念講演会の講師を依頼されました。本講演録はその際のレジュメです。どのように語学を学び、どのようにして研究をしてきたのか、というテーマをいただいていたので、まるで自分史のような話となってしまう、お恥ずかしいことです。(塩尻和子)

卒業生の中には、アラビア語を使って各方面で大活躍をしている方々がいらっしゃるの、とてもお恥ずかしいことですが、ご指名をいただきましたので何かのご参考になればと思い、アラビア語と私との関係をお話いたします。

1, アラビア語は難しい

アラビア語：世界で3番目に多くの地域で話される言語、1973年からは英、仏、露、中、スペイン語に続き第6番目の国連公用語。イスラームの聖典クルアーン（コーラン）に聖なる言語として採用されたことから、現在に至るまで、その基本的な文法や語彙はクルアーンの記事を基盤として保持されている。そのために西暦7世紀以降、おもに書き言葉である正則語には文法上の変化は少ない。しかし、アラビア語の品詞は名詞と動詞と助詞しかなく、単語は基本動詞とその派生形の活用形や変化形である。その動詞には理論的には2000を超える活用形があり、アラビア語を学ぶ私たちは多種多様な活用形や変化形を覚えることに悩まされる。世界の言語の中でも習得が最も難しい言語のひとつとされる。

2, アラビア語を学ぶ目的を探して

私は「語学を学ぶことそのものが好き」というわけではないのに、1963年に大阪外国語大学アラビア語学科に入学した。その上、アラビア語について何の予備知識もなかったの、それを学んで何ができるか見当がつかず、勉学の意欲を失っていた。一年生の最後の試験で落第の危機にあい、当時の主任教授、伴康哉（Ban Kosai）先生から「あなたは何がしたいのですか」と尋ねられた。そのときの私は「初期のキリスト教について勉強をしたい」と答

えた。すると伴先生は「2年次になるとヘブライ語やアラム語の授業が始まる、また教会シリア語は私が教えてあげますよ」とおっしゃってくださった。

私にとって、なんとか外大に残ることができたのは、この伴先生のご指導があったからのことである。しかし、アラビア語学科の卒業論文には、キリスト教関連ではなくアラビア語を用いるテーマを選び、「初期イスラーム神学思想の成立」(Formation of Early Islamic Theology) という論文を仕上げた。

今から思えば、この卒業論文が私の一生を決めることになるろうとは、そのころは思ってもいなかった。

3, 新しい目標：イスラーム神学 (Islamic Theology)

外大を卒業後は、京都大学大学院文学研究科修士課程に入る。そこで指導教授に原始キリスト教 (Primitive Christianity) を学びたいと伝えたところ、「君は大学でアラビア語を学んできたのだから、イスラーム研究をやりなさい」と命じられてしまった。同級生たちから「ここで勉強を続けたかったら、主任教授の言うとおりにしなければならぬ」と説得され、一旦は卒業したはずのアラビア語を学ぶために、数回ではあったが外大の教室に戻り、池田修 (Ikeda Osamu) 先生の授業を受けたことがある。

こうしてアラビア語の勉強に戻ったことが、その後の私の人生を決めることになった。しかし、勉強が軌道に乗りかけたころに運悪く、世間では大学紛争の嵐が荒れ狂い、京都大学も学生運動家たちによって閉鎖されてしまった。授業も行われなく、やむを得ず自宅待機となってしまった。

4, アラブ世界への淡い期待

そのころ、エジプトのカイロで外務省の研修生として学んでいた婚約者から「研修期間がおわったから、カイロへ来てほしい」と連絡があり、急遽、1969年9月初旬に、結婚式で夫が着る略礼服と私が着るウェディングドレスが入ったスーツケースをさげて、生まれて初めて一人で飛行機に乗って、エジプトのカイロへ旅立った。

アラブ世界に行って、直接、アラビア語を学び、研究を進めようという甘い考えは現地に着いたその時点で消えてしまった。カイロに着いて2カ月後にはスーダンに転勤となり、不便な場所で慣れない暮らしを立てることで精一杯の日々のなかで、年子の子供も生まれ、勉学の再開など、ますます遠のいた。

5, 39歳で再度大学院へ

2年半のスーダン生活を終えて帰国したが、2年半余りで再び在外勤務となった夫に同行して、エジプト、ヨルダンで暮らして帰国し、長男が中学生になった1982年の春に、私は念願の大学院再入学を果たし、東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程で16歳も年齢の離れた若い同級生たちと机を並べることになった。ここではこれまでの勉

強方法とは異なっている点が多く、ある先生には「勉強は若い時にするものだ」と叱られたこともあったが、ここで挫折すれば私の人生にはもうチャンスはないと、覚悟を決めていた。そして、他の先生がたや研究室の仲間たちに励まされて、なんとか博士課程まで終えることができた。

6, 55歳で夢の常勤職へ

その後、有難いことに、ハーヴァード大学中東研究所で2年間、学ぶ機会を与えられた。それからの10年間は、関東圏の私立大学で非常勤講師を務めながら、論文を発表していると、筑波大学の公募に応募するようにと、これまで厳しく指導してくださった先生がたからお勧めがあり、1999年9月に筑波大学助教授に就任することができた。もう55歳になっていた。一般には退職する年齢となっていたので、口の悪い友人たちから「筑波大学は年寄りの主婦を採用するなんて、勇気があるわよね」と言われたものである。なぜ55歳にもなった私が筑波大学の常勤職に採用されたのか、恐らくそれは、日本では数少ないイスラーム神学思想の専門家となっていたことと、何よりもアラビア語を学んできたことであつたと、今にして思う。

こうして、私は大阪外国語大学で学んだアラビア語のお陰で、遅まきながら研究者として認められるようになった。

7, 広がる分野→比較宗教学→宗教間対話→平和的共存

大学の卒業論文でイスラーム神学を扱って以来、日本では研究者がほとんどいないイスラーム神学思想の研究を続けることになって、東京大学に提出した博士論文では「イスラームの倫理思想」(Islamic Ethics) 研究を扱った。そこからユダヤ教・キリスト教・イスラームという一神教の系譜を研究する比較宗教学から宗教間対話へ進み、「イスラームに関する宗教間対話」ならこの人といわれて、国内はもちろん、世界各地でも国際学会や対話集会などに招聘されて英語やアラビア語で講演を行ってきた。いまでは、諸宗教の相互理解と平和的共存を目指すことがライフワークになった。

8, 中東の現地の人々との交流

通算すると私の中東地域での滞在は、15年近くも続いた。そこから滞在記『ヨルダン—野の花の国で—』を、夫の最後の任地についての調査から『リビアを知るための60章』(初版・第2版)を出版することができた。『ヨルダン』も『リビア』も日本では類書がない分野で、ごく最近まで多くの人々に読んでいただくということになった。また、1981年3月には当時の皇太子ご夫妻、今の上皇陛下ご夫妻のサウジアラビア王国への公式訪問で、美智子様のアラビア語のご通訳を果たすこともできた。業績も、お陰で、この3月までで、単著・共著・編著あわせて43冊を出版することができた。

改めて思い返せば、私の後半生のすべては、アラビア語のお陰だったと思える。

9、イスラーム神学

イスラーム神学はアラビア語で「カラム」(al-kalām)と言ひ、神学者や思想家をムタカッリム (mutakallim) と呼ぶ。「カラム」とはもともと「言葉」を意味する語であり、ギリシア哲学でいうロゴス (logos) にあたる。論述、議論、弁論などの意味もある。ここから「神の言葉」であるクルアーンを根本とするイスラームの教理を探求し、解説し、擁護するための学、つまり「神学」という意味に用いられるようになったと考えられる。イスラーム神学カラムは護教的な立場から認識論、存在論、宇宙論、人間論、道徳論など、哲学的研究と共通するテーマと方法を採用して展開される。

10、神学研究のテーマ：ムウタズィラ学派

ムウタズィラ (Mu'tazilah) とは「身を引く人びと」という意味で、イスラーム史上最初の体系的な神学を形成した神学派である。8世紀前半にバスラで発生し、イスラーム思想史上最初の体系的な思想運動を起した同学派は、9世紀初頭から10世紀にかけてイスラーム世界に大きな影響を与えた。やがて正統的神学だと認められなくなり、次第に周辺地域に分散して少数派となったが、その思想の一部は今日までシーア派の神学などに受継がれている。またアッバース朝下のユダヤ教徒に大きな影響を与え、現在に続くラビ・ユダヤ教神学の形成に貢献した。

ムウタズィラ学派は、理性的推論を基盤にした緻密で理論的な神学体系を形成した最初的神学派であるが、厳格な道徳論はスンナ派多数派から激しい反駁を受けた。しかし、人間の自由と責任を論じた宗教倫理思想は近年、改めて高く評価されている。

私が、イスラーム神学思想研究のなかでも、初期の神学思想であるムウタズィラ学派の研究に注目したのは、やはり大学の卒業論文から続いているテーマでもあった。

11、ムウタズィラ学派の他宗教観

8世紀から12世紀あたりまでの古文書を読み解くと、イスラーム思想はその発祥当初から周辺地域の諸宗教や諸思想を柔軟に取り入れて、イスラームの教義に適合するように合理的な解釈を加えてきたことがわかる。それは同じ神からの啓示を共有するユダヤ教・キリスト教という「啓典の宗教」だけでなく、表向きには多神教・偶像崇拜として排斥してきたゾロアスター教、マニ教、ヒンドゥー教、仏教などにも寛容な対応をすると同時に、役立つ情報を貪欲に吸収してきた。とくになかば廃れていたギリシア思想やギリシア科学を取り込み、大いに利用したことは、特筆される事実である。そこにはイスラームという宗教が本来的に包含している理性主義と実践的共存の理念がみられる。

12、中世イスラーム神学における仏教観—他宗教観の一例

中世にイスラームが辺境の地にあつてインド仏教と遭遇したことにより、イスラーム思想

のなかには仏教の足跡をいくつもたどることができる。イスラーム神学の文献には、仏像崇拜をする仏教を、「偶像崇拜」として非難するのではなく、仏教が哲学的な宗教で、人間の魂を鍛錬する方法を提示していると、むしろ評価していることが理解される。

イスラームの神学思想は特に護教的であると言われるが、現代まで伝わっている古典期のさまざまな文献から、ムスリムの学者たちが、ユダヤ教徒、キリスト教徒ばかりでなく、ゾロアスター教徒、ヒンドゥー教徒、仏教徒とも一緒になって謙虚に他宗教思想を学びあい、意見交換を行ない、ギリシア思想や古代ペルシアの文献などを比較検討して、それぞれの思想を構成していった様子を読み取ることができる。

今日のイスラーム世界では、一部であっても、強固な原理主義的思想を掲げる集団や国家によって、融和的な宗教政策が脅かされる事態に発展することも少なくない。そのために「イスラームは本来、過激な復古主義の独善的な宗教で時代錯誤的である」として、その危険性が喧伝されがちである。しかし、古典期のイスラーム世界は、多宗教多民族多文化の間で融和的な共存を意識していたことが理解される。

科学文明が未発達な時代にできたことが、通信技術が異常なまでに発達した今日には、相互不信しか生じない、ということでは悲し過ぎる。

13、今日に生きる「原子論」

イスラーム思想の伝統の中で、今日、注目したい議論が、もうひとつある。原子論(atomism)とは、世界に存在する諸物質を構成する最小単位として「原子」(atom)の存在を唱え、自然界の諸現象を機械論的に解明しようとするものである。原子論の起源については、さまざまに説明されてきたが、初期の仏教哲学にその源を問うものや、デモクリストやエピクロスなどの古代ギリシア哲学の原子論などに注目するもの、それぞれの時代に独自に発生したとする独立発生説などの諸説があるが、現在まで定説はない。

原子論は、一般に古代の伝説的な存在論の一つとして取り上げられることが多いが、イスラーム世界では神の存在を証明するために、世界を生成させた主体としての神による「無からの世界創造」(Creation ex nihilo)を明らかにし、神の全知全能性を証明しようとするための一種の方程式として、多少の差はあるが、ほとんどの神学派で採用された。

8世紀あたりから、イスラーム世界に流入してきたギリシア哲学思想の影響を受けて、新たな意味づけをされたアラビア語の単語が哲学だけでなく、神学議論にも多く用いられていた。ギリシアの文化遺産は、529年にキリスト教を国教とするビザンツ帝国の皇帝ユスティニアヌスの政策によって多神教時代の学問は排除するとして、プラトンが創設した研究機関アカデメイアが閉鎖され、ほとんど全てのギリシア語文献が廃棄され、学者たちが追放されたことによって、このギリシアの原子論的存在論も歴史の表舞台から、一旦は姿を消した。

しかし、幸いなことにイスラーム時代に入ると、9世紀にアッバース朝のカリフがバグダードに「知恵の館」(House of Wisdom)を建設し、密かに保護されていた古代ギリシアの学問的写本を収集して、その全てをアラビア語に翻訳することを命じた。半ば廃れていたギリ

シア科学のほぼ全容が、こうしてアラビア語で蘇ったのである。

イスラームの原子論は、神の全能性と世界の無からの創造を証明するために体系化された議論であるが、どの学者の見解でも、原子こそが事物の存在において第一の原理であることが理解される。そこでは原子は事物の究極的な分割によって得られる単なる「最少部分」ではなく、存在物の集合体を構成する必然不可欠の最少部分なのである。

その後、755年から約800年間、イスラーム支配下にあったイベリア半島のトレドは、11世紀以降、イスラーム文明の西方での拠点としての機能を担い、特に12-13世紀には、トレドがアラビア語に翻訳されたギリシア語文献のラテン語への翻訳運動の一大中心地となっていた。

(イベリア半島で発展したイスラーム文明については、拙著『イスラーム文明とは何か—現代科学技術と文化の礎—』をご参照ください。)

14、原子論から素粒子論へ

ヨーロッパでは、ラテン語訳のギリシア思想の影響下で14世紀から始まったルネサンスで、次々とギリシア哲学が学ばれた。かつてギリシア哲学を受け継ぎイスラーム文明の中で発展した「原子論」が、長い空白期間を超えて、突然、奇跡的にルネサンス期の人文主義者の間に蘇った。

その後のヨーロッパでは17世紀の原子論の発展に続き、ガッサンディ、ジョン・ロック、ライプニッツ、ヒューム、カント、マルクス、ニーチェ、ハイデガーと、次々に高名な学者を生み出していくことになり、ついには今日の理論物理学で学ばれる量子力学 (Quantum mechanics) の「素粒子論」 (the theory of elementary particle) へとつながった。

このような連綿とした思想の道筋として、古代ギリシア思想の原子論を今日の世界へと伝える重要な引継ぎの役割を果たしたのは、イスラーム文明であった。イスラームの原子論がヨーロッパに伝わらなければ、現在の量子力学が発展するのが、何世紀か遅れた可能性もある。こうした謎解きのような理論をアラビア語の文献の中に見出して、今日の理論と対比してみることも、大変に重要な学問でもある。

(イスラーム神学における「原子論的宇宙論」については拙著『イスラームの人間観・世界観』183~205頁)

15、外国語を学ぶ意味

他のすべての語学の学習に言えることだが、アラビア語の古典文献を読むことによって、これまで一般に知られていなかったことが明らかとなり、私たちの次の世代にさらに新たな科学技術の進歩が、導かれることになるかもしれない。

私にとっては、「外国語を学ぶ」のその先にあるものが、アラビア語によるイスラーム神学思想の研究であり、宗教間対話運動の学問的裏付けとなった知識である。

外国語を学ぶことは、今日の世界では、特に大きな重要な役割を担っている。それぞれの

人が外国語を学ぶ機会に出会ったら、人々との日常の交流は言うまでもなく、現地の政治や経済でも、文化や風俗習慣でも、地方の部族の方言でも、古典語の文献学でも、できれば目的をもって生きた外国語を学ぶなら、語学は、混沌としている今日の世界に平和的な共存をもたらす重要な手段となる。

①世界の人々を結びつけるのは外国語の力であること。

②学問の世界では、人文系も理系も、あらゆる学問の基礎は外国語にあること。

私自身は、恥ずかしいことに、いつまでも、アラビア語を上手に使いこなすことはできないけれど、いま、改めて思えば、遅くに勉学の再出発をした私にとって、私事ですが、アラビア語が得意な夫と結ばれたことも、すべてはこのアラビア語のお陰であったと感謝をしている。私自身の「その先へ」はまだ成功していないが、皆様には、この大阪で語学を学び、大阪から世界を、「その先を」、目指していただきたいと願っている。

最後になりましたが、出来の悪い学生だった私にアラビア語を学ぶことの大切さを教えてくださった今は亡き伴康哉先生、大阪外国語大学の学長を二期務められた池田修先生、そしてカイロを訪れるたびにご指導をいただいた今は亡きアブドルアジーム・シャラフ先生をはじめとする恩師の先生がたに、心からの感謝を申し上げます。

本日の講演の参考となる拙著

単著『イスラーム文明とは何か—現代科学技術と文化の礎—』明石書店、2021年

編著『リビアを知るための60章』第2版、明石書店、2020年

共著『日本のイスラームとクルアーン』晃洋書房、2020年

共著『宗教と対話—多文化共生社会の中で』小原克博・勝又悦子編、教文館、2017年

編著『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』明石書店、2016年

単著『イスラームを学ぶ』NHK出版、2015年

単著『イスラームの人間観・世界観』筑波大学出版会、2008年

単著『イスラームを学ぼう』秋山書店、2007年

単著『リビアを知るための60章』、明石書店、2006年

単著『イスラームの倫理—アブドゥル・ジャッバール研究』未来社、2001年

単著『ヨルダン・野の花の国で』、未来社、1993年

(著書・共著は2022年3月現在、43冊に上る。)

用語解説

アラム語

北西セム語に属し、3000年の歴史を持つ言語で、古代のアッシリア、新バビロニア、ペルシア帝国などの公用語、イエスが話していたと伝えられる。現在でも少数ながらシリア、イラン、トルコ、イスラエルなどで話されている。

教会シリア語

シリア語は北メソポタミアで話されていた東アラム語で、エデッサを中心に栄えたキリスト教文化の担い手の役割を果たした。8世紀以降は話し手がなくなったが、聖書の翻訳・注解などに多くの文書を残した。今日でも一部の東方キリスト教会（三位一体説のカルケドン決定を認めない宗派）では、典礼に用いられているために「教会シリア語」とも呼ばれる。時代や地域によって文字の形に相違があるが、初期教会の研究には必須の言語である。

三位一体説

キリスト教の重要な教理で、一つの神格にある三つの位格（ペルソナ）として、父と子と聖霊の一体性を認めるもので、新約聖書のどこにも、またイエスの言葉にも、この教理の「一体」という言葉は出てこないが、「父と子と聖霊」という表現を根拠にして、その一体性を認めるものである。この教理は多くの論争を引き起こし、451年にカルケドン会議の決定がカトリック、正教、プロテスタントなどに幅広く受け入れられたが、中東一帯に残った東方キリスト教会の一部は、これを受け入れず、今日までキリスト単性論（統一論）などの独自の教理を保守している。

東方キリスト教

中東地域に現存するキリスト教の宗派で、カルケドン決定を受け入れず、キリストの人性を強調するネストリウス派や、キリストの神性を認める単性論派のコプト教会、エチオピア教会、シリア正教会、アルメニア使徒教会などを指す。

ゾロアスター教

紀元前1200年ころ成立したとされる。古代ペルシアのゾロアスターを始祖とする宗教で、信徒はマズダー礼拝教と呼ぶ。中国では祆教と呼ばれた。7世紀のイスラームの伝播により信徒数は激減したが、一部はインドに逃れパールシーと呼ばれた。現在、インドと世界各地に住む信徒を合わせて約10万人の信徒が残っている。

マニ教

ペルシアのマニが創始した宗教で、ゾロアスター教の基盤の上にキリスト教と仏教の要素を加えた宗教で、世界宗教となる契機を持っていたために急速に中アジア一帯に広まったが、イスラームの迫害を受けて衰退し、13世紀にモンゴル軍の侵入をうけて消滅した。

神の属性論

特に一神教では、全知全能で、超越的な神は、世界のほかのものと比べられない唯一無二の存在であるが「創造主である神」「全能の神」「正義の神」などと神をたたえる表現

について、それぞれに「創造」「全能」「正義」といった「能力」や「性質」がついているわけではないことを明らかにする議論で、神は 99 の美名を持つとされるイスラームでは、神学思想の中で、特に激しい議論となった。ムウタズィラ学派では、この議論をキリスト教の三位一体論を応用することで、イエス論を理解しようとしたことがある。

無からの創造 (Creatio ex nihilo)

神を天地の創造主とする宗教教義では、全知全能の神は、なんら材料を必要とすることなく天地を創造した、とされる教義について用いられる用語。特に神による全世界の創造について用いられるが、人間や動物などの創造には材料を用いている。

シーア派とスンナ派

イスラームには、大まかに分けて信者の 90% を占めるスンナ派にたいして 10% 前後の少数派としてシーア派があり、シーア派には独自の教義によってさらに少数の分派も存在する。スンナ派もシーア派も互いに正統性を認めあい、宗教上は対等の立場にあるが、残念なことに、最近では政治的問題によって相互に対立することが多くなった。